

徳島県産アカムツ(ノドグロ)の漁獲量と資源状態

海洋生産技術担当 天真 正勝

Key word; アカムツ, ノドグロ, 漁獲量, CPUE

はじめに

アカムツ(写真1)は口の奥が黒いので「ノドグロ」と呼ばれ、刺身、塩焼き、煮つけ、干物と本県を始め、日本各地で幅広く食されているスズキ目スズキ亜目ホタルジャコ科の高級魚です。アカムツの生息域は日本海及び太平洋の 100~200m の陸棚や陸棚斜面の底層で、10℃台と比較的低水温を好む魚類です。

清川ら(2007)によりアカムツの特徴である脂の具合は底質由来の餌生物の量や種類により差があり、漁獲海域によってその味わいが異なることが報告されています。

深海性のため初期生態がわかりづらい魚でしたが、大西(2009)により、新潟県沿岸域でのアカムツの成長や産卵期の推定がなされ、2013 年に独立行政法人水産総合研究センター日本海区水産研究所、富山県農林水産総合技術センター水産研究所、新潟市水族館「マリンピア日本海」の 3 機関の共同研究により、卵のふ化から稚魚までの基礎的な飼育条件が解明され、アカムツを稚魚期まで育成することに初めて成功しています(飯山 2014)。



写真1. 市場に水揚げされた徳島産アカムツ

本県のアカムツ漁獲と資源状態

本県でのアカムツの漁獲量が多いのは水深 100~200m の大陸棚に面した県南域です。標本漁協資料では延縄、釣り、その他で漁獲されていますが、漁獲量に占める割合は延縄が約 91%、釣りが約 8%を占めています(図1)。

本県でのアカムツの月別漁獲量は春・夏期の 4~8 月に多く、特に 6~8 月に盛期となりますが、イセエビ等の他の漁業へ転向する 9・10 月に減少し、11~3 月にかけて緩やかに増加します(図 2)

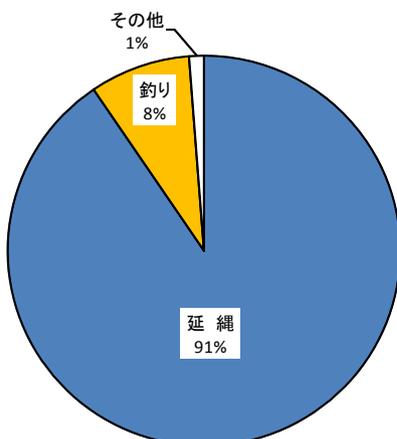


図1. 徳島県の標本漁協におけるアカムツの漁法別漁獲割合 (2000~2014年)

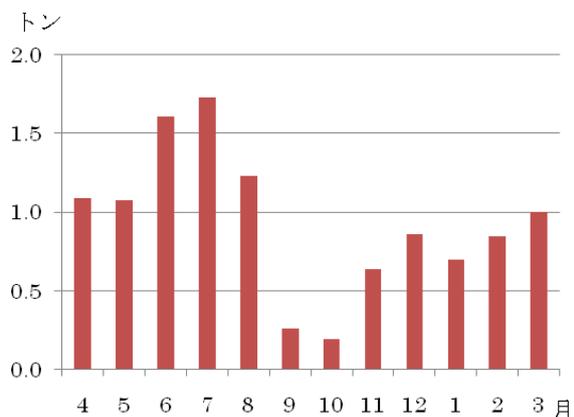


図2. 徳島県の標本漁協におけるアカムツの月別漁獲量の推移 (2000~2014年の15年平均)

本県のアカムツの年間漁獲量は 2000 年には 10 トン以上ありましたが、2001~2004 年は 5 トン前後に減少し、その後は増加傾向にあるものの 2008, 2011, 2014 年のように 3 年周期で減少傾向がみられています。

一方、資源量の目安となる 1 日・1 隻当たりの漁獲量(CPUE)は 2000~2005 年は低下傾向でしたが、2006・2007 年に急増し、その後は中位で安定しているようです。漁獲量は増加傾向にありますが、CPUE は増加傾向にないことから、近年の漁獲の増大は資源が増えたことよりも、アカムツを対象とした延縄漁業者の数が増えたことによるものと考えられます。

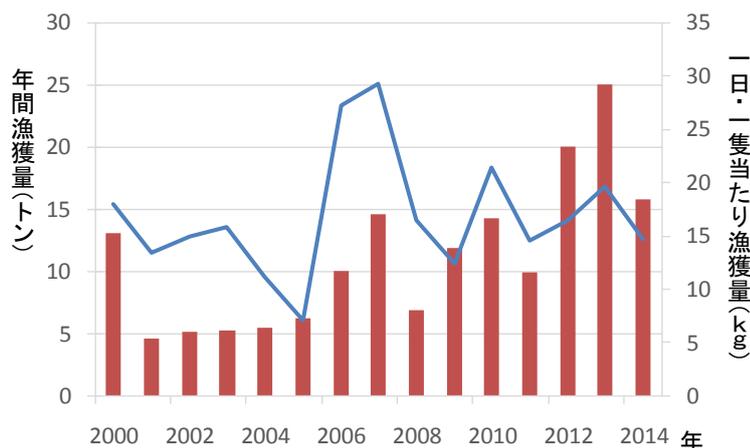


図 3. 徳島県の標本漁協におけるアカムツの年間漁獲量(棒グラフ)及び1日・1隻当たりの漁獲量(折れ線)の推移 (2000~2014 年)

今回のデータは標本漁協における漁獲データであり、未集計の漁協や漁業種類もあります。また、本県におけるアカムツの生物的知見等の基礎的データはほとんどなく、魚体の大きさを示す「銘柄」も年度や地区ごとに異なっているため、現状のデータからアカムツ資源量を的確に判定できるレベルにはありません。しかし、2005 年以降 3 年周期で漁獲量の増減を繰り返すことや資源量が中位安定にあることがわかりました。

今後、アカムツを県南の大切な魚種として持続的かつ有効に利用していくためには、漁獲データのモニタリングに加えて漁獲サイズや成熟等の調査研究に加えて、資源管理型漁業の推進が重要と考えています。

参考文献

飯山 直樹(2014):世界初, アカムツ稚魚ができました!. 豊かな海, 32, 8-11.

清川智之・開内 洋・井岡 久(2007): 島根県周辺海域で漁獲されたアカムツ総脂質含有量の季節変動と個体差. 島根県水産技術センター研究報告, 1, 19-23.

大西健美(2009):新潟県沿岸域におけるアカムツの年齢と成長及び産卵期. 新水海研報, 2, 15-20.